

# 一般教養科目でバランスある学修

田 中 則 仁

## 1. はじめに

大学での学修はとても深く広い分野にわたる。特に経営学部での学修は、対象とする領域が社会全体であり、それを形成している人の行動を科学的に考察し学ぶことである。ここでは専門知識の習得と平行して、一般教養科目の学修がいかに大切であるかを伝えていきたい。

2009年12月に発売され、2010年上半期の総合ベストセラー上位になった略称『もしドラ』と呼ばれるライトノベルの書籍がある。『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』という書名で、出版元のダイヤモンド社は2010年7月には100万部を発行したという。2011年8月には累計270万部を超え、300万部に迫る勢いである。著名な経営学者ピーター・ドラッカーの名著『マネジメント』の内容を、高校の野球部の運営にあてはめている。表紙と中の一部にキャラクターの絵が入ってはいるものの、内容はいたって真面目である。女子マネージャーが偶然入手した同書を、甲子園大会出場を目指す野球部の管理運営に用いて、野球部の改革を図るという展開である。

2009年がドラッカー生誕100年であり、長年の研究と多くの著作、アメリカ最大の自動車会社GM（ゼネラル・モーターズ）の組織改革を实践したことなどから、再評価がおこった。実務に精通し、常に理論と実践を念頭においていたドラッカーが存命であれば、『もしドラ』はわが意を得たりという心境であったろう。

この例からも判るように、経営学部で学ぶ内容は、単に企業経営や利益追求ということよりも、身近な社会の仕組みを上手く進めていくには、どのようにしたらいいかという考え方を身に付け、そのために必要な専門知識を学ぶことである。専門知識の体系を城に例えるなら、大きな知識の城を自分の頭脳に構築するためには、とても大切なことが一つある。それは城の基礎になる石垣を広く大きく盤石に造ることである。石積みが緻密に大きくしっかり仕上がっていてこそ、その上に築かれた城が高く聳え立つことができる。この石垣にあたるものが一般教養科目である。

一般教養科目には人文科学、社会科学そして自然科学の三つの分野がある。また別の見方をすれば、一般教養科目には史的空間、地理的空間、科学的空間というアプローチがある。歴史学にみ

られる時間的な流れの中で物事を見ていく姿勢、世界の国や地域を面的な広がりで捉える見方、そして科学の手法を駆使して諸現象の因果関係を捉えようとする視点である。これらの一つの見方に片寄ることなく、それぞれの見方を総動員して社会の諸問題、特に経営学部で学ぶ課題に取り組んで欲しい。

## 2. 人文科学の分野

一般教養科目の中でも人文科学は人間の知恵の宝庫といってよいであろう。中世ヨーロッパに始まった大学教育では、現代でいうなら一般教養科目の諸分野がその中心である。現在の大学ではあまり開講されていない音楽なども、重要科目の一つであった。人々の営みを、心の中から科学的に分析し研究すること、それが人文科学のねらいである。高校までの授業でも、国語の時間に国内外の文学に触れてきたであろう。古文の作品を読むことで、中世や近世の人々の暮らしから心情まで、さまざまな情景を通じて感じたり考えたりしたはずである。現代人の人間関係と酷似したやり取りもあれば、当時の社会慣習に起因して現在とは異なる考え方や行動を知ることもあったであろう。古典文学の醍醐味は、ひとたび本を開くことで、タイムマシンに乗ったかのように好きな時代にタイムスリップし、登場人物に自己投影して昔の人々との会話に入り込み、語り合えることである。源氏物語の五十四帖には、光源氏や多くの登場人物が生きいきと描かれており、現代にも通じる人々の心の葛藤が垣間見られ、当時の宮中絵巻にのような楽しさがある。また俳句や和歌を詠むことは、四季折々の自然の移ろいを言葉に託し、文章表現する楽しさを知ることにある。松尾芭蕉が辿った奥の細道は、現在でも要所要所に碑文が残っており、夏の息吹や、天空の銀河をいまでも共感できる作品である。心に感じたことを適切に表現するには、達意の文に接し、自分の文章力を磨いていくしかない。本を読み進むとさまざまな情景描写に接し、こんなことが言いたかった、こういうことを表現したかったという文に出会うであろう。それを積み重ねていくことで、自分らしい心のこもった的確な文章表現ができるようになる。そのためにもいろいろな分野の多彩な本をたくさん読破してほしい。

史的空間の中心を形成するのは歴史学である。歴史というと、日本史や世界史は暗記ばかりで大変だったという思いの人も少なくないであろう。歴史年表を始めからずっと暗記するだけなら、こんなに辛い作業はない。しかし歴史の本当の面白さは、一つの出来事には必ず原因があり、全ての事柄が密接に繋がっていることを知ることにある。どんな些細な事であっても、ある日突然何の脈絡もなく発生することはない。なぜならば歴史を作るのは人であり、何らかの原因や動機があって人が行動するからである。歴史はそれぞれの時代の人物の動きと言い換えてもよからう。そのような登場人物の行動による原因と結果という関係をみていくと、歴史は連綿と繋がって起こる壮大なドラマであるともいえよう。歴史が興味深いのは、そこに生きた人々の思いややり取り、息づかいが見てとれるからである。現在身近に起こっている社会の諸現象も、過去のいろいろな出来事が関

連し、有機的に繋がって発生している。現在の状況を正確に見極め、将来を鳥瞰する最も良い方法は、過去を正確に知ることである。例えていうならば、過去や現在の出来事はジグソーパズルのピースである。それぞれがどこかのピースと繋がり、全体の一部を形成している。歴史は繰り返すという諺があるが、単純に歴史が繰り返されるわけではない。個々のピースだけを見てもなかなか判らないが、各ピースがあるべき位置に収まってくると、全体像が浮かび上がってくる。歴史を知ることが、現在の実像を正確に把握し、そして次に来る未来を見極めることに繋がるのである。

次に語学の修得を考えてみよう。語学は人と人との心を繋ぐコミュニケーションの道具である。大工道具の中を想像してみると分かりやすい。熟練の大工さんが持つ自慢の道具箱には、さまざまな用途に使う多種多様な形状と大きさのノミや鉋が入っている。しかもすぐに使えるよう刃が研ぎ澄まされて揃えてある。語学も意思疎通の道具であるからには、大工道具と同じような事がいえる。単語はノミや鉋と同様、用途に応じて数多くあった方が良い。しかも必要な時に正確な単語や表現がざっと口から出て使えるよう、いつも語彙や慣用句を増やして研ぎ澄ませておきたい。会話やコミュニケーションはキャッチボールと同じだからである。キャッチボールは相手と正確に素早くやり取りすることで楽しさが倍増する。

語学の修得の次の課題は、相手の価値観を知ることである。語学ができるようになると、自分の意見や考えを相手に伝え、さらに相手の見かたを知ることによって自分の世界が広がるのである。そこで直面するのは、相手が何に重きを置いているか、どのような事を大切にしているかを正しく把握することである。次の例をみてみよう。世界各地の人々で、家族を大切にするという基本になる気持ちには違いはない。しかし家族が集まる時期やそれぞれの意味づけは、国により民族により異なっている。日本では多くの家庭で、年末年始は家族が集う大切な節目である。年末には大掃除をして家族が揃い、一同で元旦を迎え厳粛な気持ちで新年を祝う光景がある。欧米の家族であれば、11月下旬の感謝祭には、各地で仕事をしている兄弟姉妹が万難を排して故郷の親元に帰って家族で集う。中国系の人々であれば、2月上旬の旧暦の正月いわゆる春節に合わせて、一族が集合し大晦日と新年を祝う。日本人にとっては豆撒きを連想するくらいの節分の時が、中国系の人々には1年で最も大切な家族の絆を確かめる時期である。家族を大切にする心は世界共通であるが、一族再会の重要な時期と意味づけはそれぞれに異なっている。英語でサンクス・ギビングを感謝祭と訳した時、そこに込められている家族の無事を確かめ感謝する気持ちは、日本人が新年を迎えた時に似た心情であることを理解しなければならない。語学の修得を通じて、異なる価値観を理解し、異文化理解や異文化コミュニケーションを深めることにつながる段階である。

### 3. 社会科学の分野

人々の暮らしを取り巻く日常の生活の仕組みには、法律、政治、経済などさまざまな事項がある。人文科学が人間の内面を掘り下げ、その本質を深く研究する分野であるのに対し、人々の営みを形

づくる制度や組織に関して学ぶのが社会科学の分野である。日本は法治国家であるから法律が制定され、それによって人々の暮らしが守られ、また義務が課せられている。国家の基本方針である憲法が、日本の立場を示し、国としての意思を表明している。さらに民法、刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法、商法のいわゆる六法が国のきまりとして法制化されている。これらは法律学を学ぶことでより深く理解ができる。政治学では民主主義の制度や諸外国の政治制度を歴史的に考察し、比較制度的な視点からも分析して、現在の制度とその問題点などを学ぶことができる。政治体制は唯一絶対のものではなく、時代とともに変化し望ましい姿を模索している。将来の政治の姿を考える観点からも、積極的に学び考えていきたい分野である。

経済学では社会における人々の経済行動を、企業や政府との関係の中で考えていく。さまざまなものが持つ価値を価格という尺度で表し、その価格の仕組みをもとに、企業や消費者がどのように行動するかを分析する学問である。さらにこれらの経済主体が、資源配分の効率性、所得分配の公平性、そして経済の安定成長をめざして行動しながら、豊かになる道を探っていくのが経済学のねらいである。人は社会の中で生活する以上、経済の仕組みと無縁ではいられない。自分たちの暮らしがどのようなになっているのか、今後どのような方向を目指していくのかを考えるためにも、経済学を学んでいくことは重要である。

経営学は企業の組織構造を研究することから始まり、現在では企業だけでなくさまざまな組織体の行動、構造、運営に関する考察をする。本稿の冒頭で示した『もしドラ』の高校野球部の管理運営は、まさしく経営学の対象領域である。現在では経営学の研究対象はとても多岐にわたっている。経営組織論、経営倫理論という基本的な分野から、経営戦略論、経営計画論という企業や組織の方向付けとその手法を考察する分野がある。また企業をはじめどのような組織でも、人が集まれば必ず資金が必要になりお金が動く。そのお金を誰もが分かるよう正確に記録する簿記論、無駄がないかを見極めて適切に管理し運用する会計学の分野もある。さらに組織が人によって成り立っているからには、その人々への労務人事管理や、人の力を伸ばしていくような仕掛けをする人材育成や人材開発の仕組みも、今や重要な研究領域である。企業の事業拡大にともない、海外事業展開していく企業が増えると、国際経営論で海外事業の管理運営を考察し、多国籍企業論の研究がますます深化してくる。国家と国家の関係では国境が重要な意味を持つが、企業の事業活動ではそこに市場があり消費者がいる限り、国境を越えて事業を展開するのが当然の行動である。海外市場の消費者の嗜好を知り、また海外の事業所で外国の人々を雇用し、力を合わせて目標を達成すべく仕事を行うためにも、異文化コミュニケーションの視点はますます重要になっている。

地理的空間に関する地域研究は、経営学部が目指す国際人材の育成という観点から、とても大切な分野である。前項の人文科学では異文化理解、異文化コミュニケーションの重要性を説明した。現在地球上には200を超える国や地域があり、68億人を超える人々がいる。日本の経済や企業経営はもちろんのこと、今や私たちの暮らしに諸外国との交流はなくてはならないものである。身近な例で食卓の食材を思い出してみよう。日本国内産の食材は、ご飯のお米以外ではとても少ないであ

ろう。刺身のマグロはインド洋や地中海から冷凍で輸入されたり、豆腐の大豆はアメリカ産、牛肉はオーストラリアやアメリカから届いている。このように気付かないうちに、私たちの暮らしは確実に国際化し、外国との深い相互依存関係で成り立っているのである。

地域研究の第一歩はアジアの隣国や、好きな外国人スポーツ選手を通じての関心でよい。どのようなきっかけでも、先ずはその国や地域に関心を持つことである。無関心という状況では、相手への理解はおろか存在が無いことと同様であるからだ。次はその国の歴史や文化、宗教や社会の仕組みなどを少しずつ学び、理解を深めることになる。このような国際理解を重ねていくことで、語学を学んだりしながら、異文化理解へと深めていくことが地域研究のねらいである。異文化コミュニケーションのねらいは、自国と外国の、あるいは自分と相手との価値観の違いを認めながら、相互に尊重合う姿勢をしっかりとつことである。

2001年9月11日のアメリカ同時多発テロでは、テロリストや首謀者がイスラム教徒であったことから、イスラム教への批判やイスラム教徒アラブ系市民への風当たりが非常に厳しくなったことはまだ記憶に新しい。当時のアメリカ社会では、空港保安検査はもとより地域社会の中でも、人種による区別を通じて社会の安心と安全を確保しようという人種プロファイリングという言葉が使われてきた。長い歴史の中で、多くの国際紛争や侵略戦争が、宗教対立や布教や宣教上の理由で起こったことは事実である。しかしそうだからといって、宗教そのものを短絡的に批判することは正しくない。一部の過激な信徒やグループは、どのような団体にも存在するであろう。批判されてしかるべきは、私利私欲のために宗教を利用し、自分にとって邪魔になる存在を、暴力など手段を選ばずに力づくで排除しようとする強欲で専制的な人々や組織である。人種偏見を無くし、基本的人権を確保することこそが国際感覚を持った価値判断になる。それぞれの宗教の教義や政治的な活動の様子などを、きちんと正確に理解することが何よりも重要であり、宗教を始めとする異なる文化や社会の人々に接する基本的な心構えである。

#### 4. 自然科学の分野

私たちの周りの自然現象を対象にし、その仕組みや成り立ちを解き明かすところが自然科学の分野である。自然科学には数学、物理、化学、生物など多岐にわたる分野がある。それぞれに長年の蓄積と学問の発展を遂げて今日に至っている。自然科学というと日常生活にはあまり関係が少なくないように考えがちであるが、さまざまな領域で基礎になっている。現在では社会生活に不可欠なコンピュータやインターネットにおいては、その論理構成に数学を基礎とする情報科学の多大な貢献がある。メールの送受信やインターネットショッピングでのクレジットカード情報などは、数学の素数をもとにした暗号鍵が活用され、大切な情報が漏えいすることを防ぐ仕組みを提供している。

また、自然界の生態系を広く研究する中から、工業デザインの分野をはじめより広い視点で活用できる、バイオミクリーという概念がフランスの生物学者ジャンニ・ベニユスによって提唱され

ている。自然界のモデルを学び、そのデザインやプロセスを真似、インスピレーションを得て、人間界の問題を解決する新しい科学である。生物模倣ともいわれており身近なものでは、カワセミの嘴が水中に入っても泡を出さずに獲物を捕獲することから、その造形を新幹線の500系の先端の形状に活用したことなどがある。さらに新幹線の最新型N700系はカモノハシの口にヒントを得ていることなどを考えると、自然界の生物や生体に学ぶことは数多くあるのであろう。進化の過程で適者生存の原理の中、最も無駄がない流麗な形状の姿態を備えたものが、永い年月を経て選ばれて生き永らえた例といえよう。

近年特に関心が高まっている環境問題は、私たちの社会生活と自然環境の共生をどのように保つかという大きな課題である。世界の人口が年々増加し、石油や石炭などの化石燃料の使用で地球全体の温暖化が進んできたことは、テレビや新聞で毎日のように報道されている。一方で、人間の生活や社会の仕組みを、根本的に考え直さなければならないが、自動車の利用や工業製品の生産と活用など、それらが発明される以前の社会に戻ることはできないことも現実である。自然の生態系や姿は、人が増えて開発したことで変化した部分と、人が手をかけないと維持できない里地里山のような自然の両方がある。熱帯雨林の環境破壊などは、森林資源の木材伐り出しのために、貴重な樹木が伐採されたことによる。伐採した跡地や山に苗木や若木を植える活動が行われている。しかし、一度生態系が破壊された森林では、降雨で表土が流されてしまい、なかなか森林として再生させることは難しい。いわゆる非可逆的な破壊が進んでいる。もちろん再生が難しいから諦めるのではなく、どのようにしたら森林が再生し緑が戻るかを、科学的な見地から検証し、挑戦していかなければいけない。

1970年代に深刻化した公害問題の反省から、日本では大気汚染や排水汚染への厳しい基準ができ、少しずつ河川や海の生物が戻りつつある。自然科学を学ぶことで、現代の社会問題と自然環境の調和という厳しい現実を知り、環境問題に取り組む基本的な心構えや考え方を養うことになる。生物学の深い内容までを短期間に修得することは難しいが、学生として環境問題に対していま何ができるかを考え、そのためにどのような行動をとるべきかという提案を発信することが課題であろう。

また少子高齢社会の現在、次のような事例が知識を共有して目的を達成することの参考になろう。高齢者向けの車椅子でどこへでも移動できるように、バリアフリーの住宅を考案した時である。車椅子利用者にとってはわずか数センチの段差でも、それは越えられない壁のように立ちはだかることがある。そこで車椅子での円滑な移動には、家中の段差をなくして床面を水平にしたいのが介護師の立場であった。一方、風呂場の水が浴室内から溢れないよう、どうしても段差を付けざるえないのが建築士の立場であった。そこへ水の性質を熟知した専門家が登場し、風呂場の水を溢れさせず、車椅子での水平移動を可能にする方法を提案した。それは風呂場の境を水平にする代わりに、高さ数センチの薄いゴムの板を壁のように立てて風呂場との境に取り付けるという簡単な事であった。風呂場のシャワー程度の水は、ゴムの板で浴室の内側に戻りし、また薄く軟らかいゴム板の境であれば、車椅子移動には支障がなかった。これはそれぞれの専門を活かしながら、足りないところを

補って最良の解を導くという文殊の知恵の例といえるであろう。知識を持ち寄り相互に補うことで、何倍もの成果を生み出すことができるのである。自然科学の知識や理論を、さまざまな形で社会生活に活かすことが、人々の暮らしをより豊かにする大切な手段になる。

## 5. 一般教養科目のねらい

一般教養科目の諸分野が、これからの勉学の重要な基礎になることを述べてきた。これから専門分野の研究は、ますます深くなると同時に、専門分野の垣根を越えて他の分野と協力し合う学際的な研究が必要になる。前節で例示した環境問題は、生態系の破壊や温暖化という自然科学の問題でありながら、社会全体で取り組まなければならない課題である。さらに一人ひとりの努力や心掛けは不可欠ではあるが、地球環境に関する大きな問題は、世界各国の政府や企業が私利私欲を捨て、本気で協力して取り組まなければ到底解決することができないのである。その意味でも、国益を重視する各国の国内事情を正確に理解し、少しでも前進できる方法を探る努力を重ねていくことが国際理解であり、異文化コミュニケーションを確立するための地理的空間の研究である。

私たちは自分の生まれ育った環境の中で形成された価値観に基づいて物事をみる傾向がある。その視野を少しでも広げるために、人文科学の勉強を通じて名著をひも解き、先人たちの知恵に学ぶ。また社会科学の方法論を身に付け、組織や制度への理解を深めながら、世界に目を向けそれぞれの価値観の違いを学ぶ。その過程で日本の常識は世界の非常識であることに改めて気付くであろう。水道の蛇口を回せばきれいな水が出たり、スイッチを押せば電気が点灯する日本の豊かな暮らしは、世界の国々の中では実はとても恵まれたことであることを認識してほしい。

世界に羽ばたく国際人材を養成する経営学部の実現するために、一般教科目の様々な分野を意欲的に学び、冷静な頭脳と、異文化にも寛大で、温かい心を持った社会人になっていただきたい。将来、各自が専門とする分野をもち、さらに得意とする地域をもった国際人になる皆さんに、一般教養の勉学は盤石の基礎を提供することであろう。いつも知的好奇心を旺盛に持ち、一般教養の諸分野に挑戦してみよう。

## 参考文献

『日本の歴史』全31巻、井上光貞編著、中央公論社、1965年

『世界の歴史』全30巻、樺山紘一編著、中央公論新社、1999年